顔

メキシコでの一年間を終えて昨年帰国した**鶴見俊輔**さん、メキシコでのゆっくりした時間の流れを持続すべく、特に必要のない会合には出ない、締切りはふやさないようにしている、ということだが、やはりそうもいかないようだ。メキシコでの経験をもとに『展望』連載の「メキシコノート」で脱国家の可能性を書いている。

『方位を求めて』という小説（筑摩書房刊）を、まだの人はぜひ読んでほしい。フランスのアナキストたちと親交ある**江口幹**さんのすぐれた作品で、いま若い人たちの間にジワジワと浸透して読まれつつある。ところでこの自称〈過激派〉、隠やかで実につつましいお人なのです。

九州は福岡県、静かな田舎町豊津に住む**前田俊彦**さんはまさに市井の哲人である。山羊を飼い、鶏を飼い、自ら耕し、客人あれば乳を搾り、菜を摘んでもてなす。とつとつと、しかし熱く語る語句は、常に……じゃなかろうかと、自他に問いかける。

高史明さんは不遇な青・少年時代を主体的に捉え直す中からつかんだ文章表現に依り、自己を開いていった人。日本人と朝鮮人が互いに認識を深め合う中から得るまっとうな距離感。それ自体は必要なことであっても、なおそこからこぼれる人々はいる。今号の文は、自分もあぶれ者の一員であることの認識とそこからの出発の志をこめて書かれた。

水木しげるさんの南方熱は、行くたびに募るようだが、今回は特に激しく、真剣に移住の可能性を考えているという。

福岡県と大分県の県境、中津の町のとうふ屋さんだった作家の**松下竜一**さん、片方の肩を落してまともに目もあげぬほど内気な人だった。それが見よ、いま法廷に総理府に獅子吼して明るく笑う。人間は変わることができますという見本のような人だ。

『隠された公害』（三一新書）などで知られる**鎌田慧**さんはフリーのライター。そう自己紹介するとライター屋さん？　といわれることがあるそうだ。『自動車絶望工場』（現代史出版会刊）は、トヨタ自動車の工場に臨時工として働いた六ヵ月の体験記。この本、ライターのようにパッとは燃えぬが、いずれあちこちの生産現場での火だねにはなるはず。

朝日新聞では、農業問題担当の論説委員である**篠山**（ささやま）**豊**さん。毎夜のように焼跡の伸愛学園に通う。子どもたち、支援者たちの信頼絶大、ここに人ありという感じ。

昨年暮、仮釈放がついて静岡刑務所を出所したという**田中省吾**さん、彼に空手とともに戦法・忍法を教えたという今は亡き老師（二代目師範）の想い出を熱っぽく語っていた。（なお、信濃忍拳己修拳流についてお知りになりたい方は「終末から」編集部気付で御連絡下さい。）

森ただしさんは北海道生れの24歳。明大卒業後サンフランシスコに住むこと2年。CANE の夕食会で司会をしたら、日系老一世近づいて曰く「あなた日本語うまいですね」

RNAのアピールと独立宣言の翻訳者、**森谷文昭**さんは31歳。ICU卒業後、フルブライト留学生として米国に学ぶ。訳書、ラッセ・ベルグ著『インド（緑の革命と赤い革命）』（朝日新聞社刊）

シンガポール事件発生直後にビラをまいた、というだけで新聞ダネになり、その代表A氏は日夜私服警官の護衛（？）つきという**世界革命戦線情報センター**、権力としてはシンガポール、クェートのカタキを東京で、というわけか。

ソヴェトから始まり、アジア、ラテンアメリカ等々をかけめぐって半年ぶりに帰国したばかりの**小田実**さん。途端に休むひまもなく三・三〇大集会とデモの準備に大奮闘。合間に小説、エッセイ、対談、テレビ出演等々相変らずの超人ぶり。

「漁民というのは一国一城の主で連帯とかはなかなかしないのですが、やっと瀬戸内海に闘う漁民の組織ができそうですよ」と語る**星野芳郎**さん、彼のグループの地道な努力がいま実ろうとしている。

＊

青島幸男さんの「三下り半」に描かれた日本は滑稽でも悲しい。しかし残念ながらみんなホントのこと。

横山好夫さんは、昨今話題を集めたゼネラル石油精製の組合員。企業内告発的文章に、本名を出していいのかと、電話で念を押したところ、いえ、もう首になってるんですよと大笑い。一丸となった反省の実を示すために、あるいは社長から復職命令が出るかもネ。

〃悪役〃**内田良平**さんの、世の不合理なることへ寄せる怒りは深い。実際に〃悪役〃ぶりを発揮する意気もみうけられる。

天皇制との闘いを五十年間も続けている名古屋の**松井不朽**さん、戦後出し続けた『金剛石』がつい先頃千号で終刊した。現在は新しい新聞の刊行を企画しているという。

世の終りとはしょせん自分の死ぬ時にすぎないと思い定めてみれば人生に透明な感覚をもってのぞめそうだ。**阿部昭**さんの一文はそこに一つの示唆を与える。

筑豊の一角に永く住んで、老坑婦や朝鮮人たちと魂の深みでつき合いつづける**森崎和江**さん。この人がとおどろくほど、色白くきりっとした美人なのです。

日本近代史学者**色川大吉**さんの『明治精神史』以来の仕事は、歴史書の文体を一変するほどのものではないか。それは足でする資料の発掘と、民衆への深い愛、鋭い透察に支えられて初めて成るものなのだ。

美しいまゆみ夫人を残して旅立った宮**松宏至**さんは、本誌三号に登場した上野英信さんと同行。アメリカインディアン、日系米人、原爆を撮り続けてきたが、今度は上野さんと共に筑豊を追われた鉱夫たちを追う。

物価狂乱一寸先は暗闇のいま、具体的行為を提起した**大門一樹**さんのよびかけは説得力がある。

今年も医・法・商・経・文各学部をかけもちで受けた受験生がいると聞く。**山崎朋子**さんの文を読んでもらいたかった。

＊

約二ヵ月間、銀の針金で上下の歯をしっかり固定されていた**山本美智代**さん。手足を拘束されるよりもなおつらい口を封鎖されてさぞかし閉口したことでしょう。今回は日本の伝統的な日記文学に挑戦?!

金仮面氏は、女体にあきる男はないという。女性もそうなのだろうか。

ここ二ヵ月失業中の**呉智英**さん。こんなこともあろうかと昨年末のボーナスを預金しておいたといって悠々自適の毎日。オレ預金生活者だぞ、とはオーバーなこと。

京大病院の外科医、**小野博通**さんは今冬、スキーの一級ライセンスに挑戦。10年目の悲願達成の報はいまだ編集部に届かない。今ごろ外科医の世話になってるのかな。

＊

昨年暮、書類送検されて以来、地検からいっこうにお呼びのかからない**赤瀬川原平**資本主義共和国さんは何となく気抜けした表情。読者各位御期待の「獄中記」の可能性は遠のいた。それでも読みたい人は地検に催促の手紙を出そう。

不調なからだをおして図版構成をして頂いた**木村恒久**さん。巻頭オフセットのうち扉と2～5頁と最終頁が木村さん製作になるものであり、他の頁は、『読書新聞・ドミュニケーション』で情報分析を連載している**大久保隆史**さんと**小野雄一**さんの製作である。なお、木村さんも赤瀬川さんも、もっともらしいエネルギー計算をしているが、これには当然のことながらまったく科学的根拠はない。

前号でお伝えした**秋竜山**さん作詞のレコードは「ジャンボ・マックス」。パイオニア四月新譜。一枚どうぞ。

最近、油絵の個展を開いた**井上洋介**さん、「今回は画廊の人にシブイ顔をされましたが、なるべく売れないような絵をかいたんです」。

毎号「吉里吉里人」のさし絵のために京都から出てきて、編集部と同じ旅館で井上さんの原稿の進行を待機する**佐々木マキ**さん、校了間際の狂乱状態の部屋の隅で笑みを浮かべながら静かにウイスキーを飲んでいる。

建石修志さんの部屋の紹介が『女性セブン』に掲った。年齢不詳的子供部屋的仕事部屋。

小誌創刊以来おなじみクマさんこと**篠原勝之**さん、追い込み中の旅館で絵を仕上げ朝風呂に入るのが楽しみ。だが今日の宿は朝風呂がない。まもなくやってくる、どうしよう！

南伸宏さんはこのところ盛んにご自慢のエラを強調した写真を撮っている。私をエラんでくれというダジャレか、見合写真のつもりならエライことだ。

一コママンガに強い執着をおぼえるという**千葉督太郎**さん。「平凡パンチ」の野坂昭如さんの小説にイラストをかいている。

インド、ネパールに渡ること既に二回。**前田常作**さんは曼荼羅を追いつづけてやがて20年になる。これこそが宇宙の秩序、モダンな世界。点描の手法は宇宙の意志を鼓動として感じるがため。目下の横尾忠則さんの仕事に注目しているという。

年末年始をメキシコで過ごした**戸井十月**さん。人間はどこで、どんな風にも暮していけるという自信をつけて帰国。目下「くらしを奪い返せ、3・30大集会」の準備に忙殺。

最近、蛇皮線に凝っているという**後藤一之**さん、沖縄民謡のメロディーは弾けるのだが、どうしても音が「西洋音階」的になってしまうそうだ。

岩本久則さんは海上自衛隊に10年いた。「ハッ！　違憲のメシを10年食

ってました！」

高橋矩彦さんは26歳のイラストレーター。苦みばしった男のイラストをかくと自称しているがはたして…

伸愛学園を訪れた人は、少年や保母さんたちのきびきびと動き回る姿に思わず引込まれてしまう。社会派カメラマン福島菊次郎さんもそのひとりだ。「稿料は再建委員会にカンパしますので、そちらへ」と彼。

＊

第一回目とはガラリ変ったタッチの小説を書いた野坂昭如さん、八方破れの構えで臨む「八方鬼門」の今後に御期待下さい。なお、エレックから出したLP「不浄理の唄」が売行順調で、四月十一日に新曲「終末のタンゴ」がシングルで出る。作詞作曲は、もちろん熊吉利人こと桜井順さん。

日本のいつに変らぬ対外感覚を十四世紀を背景に描いた小松左京さん、朝鮮のおかれてきた政治的位置にも注意してほしいとのこと。

このところ田辺聖子さんが発表される文章には、とみに男の悲哀への理解が深まっているようだ。今号の「草ひき」もまた。

鳥海山に噴煙、関東に地震、トルコ機の墜落。そして中井英夫さんはかぜをこじらせてしばらく寝込んだ。今回、いつもより枚数が少いのはそのためです。

毎号毎号、見事な〝キリキリ舞い〟を演じて見せてくれる井上ひさしさん、本号の第五章で、のべ数枚三百五十枚となり、井上さんの、小説の中では最長のものとなった。しかし全体の構想からすれば未だ六分の一弱まできたところ。

鶴見さんの「半国家、準国家、透明国家」という言葉に大いに示唆されるところがあった、という井上さんが吉里吉里国の将来をどうつきつめていくか、期待されるところだ。

＊

鈴木志郎康さんの「時間なき人々」は今回お休みです。

「終末から」既刊——在庫あります

Ⅰ　特集　破滅学入門
Ⅱ　特集　①ニッポン列島ノーリターン
　　②破滅を前にこう生きる
Ⅲ　特集　破滅か、変革か、……まだあきらめの時ではない
Ⅳ　特集　①青春のいま
　　②還らざる川
Ⅴ　特集　私からはじまる反乱

■　定価各号　三八〇円　送料一部につき一〇〇円
住所氏名明記の上、左記宛お申し込み下さい
東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房営業部読者係

海

味戸ケイコ

小さいころ私は、海がこわいくせに海であそぶのが好きでした。

いつも、ゆりかもめの羽がだいだい色にならないまえに海から続く草むらを通って家までかえるのです。

草むらのなかには空家がぽつんとうつむきながら立っていました。入口はしっかりクギづけされて窓のなかはいつもまっ暗でした。まるで、夜を切りとったような暗やみが恐ろしくて、いつも駆足で通りぬけたのです。でもいつか、あの窓のなかを見てみたいというおもいに胸いっぱいになりながら走るのでした。そしてある日、とうとう決心したのです。

ゆらゆらと背のたかい草は揺れていました。目の奥でまわりのものが白く滲んでゆきました。気がつくと私は恐ろしい窓のまえに立っていました。そして、その暗やみにすっぽり包みこまれたときそこにあったのは、海の底にも似た優しい空間だったのでした。

★五号の特集をめぐって

＊『終末から』という誌名から週末を連想して、文部省推薦のレジャー雑誌と思いこんでいたが、今度五号を初めて読んでみて、はたして大娯楽雑誌であって、その出現には遅しさを感じた。

ときに、読みものとしては、有名大先生のがよかったけれど、けれども、「私からはじまる反乱」にみられる切実さがそれらにはない。八方破れふまじめもいいけれど、「ナルホド」「フンフン」で終始してしまう読みものは、最近氾濫しすぎる気がする。四号を読んでないからうまく言えないが、ここの欄に悪評しきりの「天皇よあやまれ」にしても、それが載ったことで近ごろとみに欠如している若者の問題意識を啓発したのは否めないと思う。語ろうとすれば語れる有名大先生の文より、切実な体験にもとづいた文を私個人としても望みたい。（佐賀県・西川孝弘・高校生・18歳）

＊橋田・猪野両氏の、激しくもなまなましい生き方、言葉にうたれました。私はいろんな人のいろんな生き方、知りたい。トイレットペーパーの値段よりも、言いたいこと山程かかえてる人の話ききたい。（富山市・池田香葉子・無職・25歳）

＊「石をもて私を打て」を読み、これ程当り前のことを理解できない私たち、そして今の日本に悲しみしか覚えません。一人一人が、公約として大切にされるのではなく、ほんとうに生存の中に位置づけられる、そんな社会を創り出す人柱として、礎石として、橋田さんの訴えは私にとって心が痛みます。私も私の場所で沈みこみつつ正しく自分にとって悔いのない死に向って、生きてゆきたいものです。（橿原市・吉永宏・研究所長・38歳）

＊「私からはじまる反乱」というのは実に哀しいものであるが、僕にはどうすることもできない。自分から反乱なんぞは起せません。生きる理由なんて、死ぬ理由がないからであって……世界がもだえ苦しもうと自分がもだえ苦しまないので、いくら世界が自分を苦しめてもその世界に妥協して生きていくんだ。……甘えた自分がこんなこと書かせているのだということも自分ながら理解しているんだが、この自分のどうしようもなさに対してのたたかいを、他人のでもいいから載せてほしいと思うものだよ。（横浜市・京念義則・学生・19歳）

＊頭が痛い、ズキーンとぼんやり痛い。はじめて『終末から』を読んで、頭が痛くなってしまった。気分がよくて、フトコロが暖かくて、そして〝私からはじまる反乱〟にひかれて買ってしまったが、気分を悪くしてしまった。ぼくはどちらかといえば、いわゆる正統派的考え方をしてると思うので、自分では誠実に、人間としてまじめにするのだが、いつのまにかエコノミックアニマルの尖兵的役割を引受けてしまう人間になってしまうような悪い予感がしている。『終末から』にのっている、社会のレールをはずされてしまった人、自らはずして生きている人たちの文章を読んでぼくは頭が痛くなった。今までに障害者や、差別された人々の文章もたくさん読んでいるが、どちらかといえば社会に批判的ではあっても、今の社会に数あるレールに自分たちのレールを入れようと必死であったような気がする。そういう意味では、ぼくにはまだ救いがあった。しかしここにある文章の多くは、自分からドロップするような所があって、かつ〝生きている〟。今のぼくでは頭が痛くなるよりどうしようもない。（名古屋市・後藤孝一・学生・22歳）

＊橋田みずほさんの文章、興味深く読みました。特に、昨年の夏の終りに自らの命を絶った小林美代子さんについての文章。私もそう思いました。小林さんの遺稿「むしばまれた虹」を読む時、自分自身に何度も問いました、私の方が狂っているんではないかと……。小林さんを死に追いやったのはまぎれもなく正常人ぶった私たちだったかも知れないと最近思う私です。（大阪市・児童画教師・女）

＊山崎三郎さんの章を読んで、一目顔が見たくなりました。やはりだじゃれで通るお顔でいらっしゃいましょうか。少々ふまじめにも感じ、赤っぽくも感じ、なによりも一字一字に新鮮なせんりつを覚えました。イライラしていた私にゆっくりと心の中に風がふきつけてきた思いです。表紙、グラビア、小説、共に私を裏

どうも…

読者に、執筆者に、編集者に、言いたいことを何でも言うページ。宣伝したいことを宣伝するページ。ハガキ一枚が適量。ただし制限ではない。氏名・年齢・性別・職業を明記して、編集部『どうも……』係へ。

切らなかった。（大阪市・長岡信子・ファッションモデル・20歳）

＊橋田さんの「石をもて私を打て」を読んで、狂える権力の網にかかりながらも必死になってその網を断ち切ろうとしている姿勢に深い痛々しさを味わったが、それだけでなく、どん底にまで落された女性、母親の生命力のたのもしさに強く人間的共鳴をおぼえた。弱き者は自分自身を弱き者として自己確認しなければその出発は始まらないのである。（東京都・佐々木弘幸・学生・20歳）

＊それなりの苦を負わなければ、そしてそれを越えなければ老いも豊かにくるはずはない。女だから猪野、橋田さんに深い愛の存在を思い、山岡さんの意志の強さに圧倒されて、それでも私には何もする知恵がないんだと思い知らされる。せめてはエンマ様との対決の場で私はメソメソ哀願するとはやめよう、極楽なんて三日もいれば退屈してしまうだろうとわかるつもり。今することは、何とかしてこの地球がきれいな空気にあふれ、子孫が健全であること。（大阪市・内村秀・ビル掃除小母ちゃん・62歳）

＊はじめて伸愛学園のことを知りました。私は社会福祉を専攻しています。福祉はいかにもりっぱな指導援助をしているように学校では習いますが、しかし現実には、伸愛のように、入れてあげているのだ、おまえらは助けてもらっているんだ、どうしようもない子供なんだなどと、社会や管理者たちは思っているのが現状ではないでしょうか。（東京都・野瀬房子・学生・20歳）

＊「私からはじまる反乱」は、読みごたえがあった。特に考えさせられたのは猪野さんの手記である。肉体は人間にとって最後の環境である。障害者（差別言辞だ）は、多分いかなる社会体制であろうと、支配者にとって目ざわりな存在に違いない。支配者にとって都合のよい人間とは、「生産」する人間であり、とりわけ生産性の高い人間なのだ。「生産」が出来ない人間は、カタワ者か（これも差別言辞）無能力者、反社会的人間だとされる。もちろんそのような考えは誤りだと思うのだが、支配イデオローグによって、殆ど完全なほどに、大衆の中に思想化させられているのが現実なのだ。貧民は悪であり、身体的にミニクイ者は悪なのだという支配階級プチブルの価値観を打破できる思想は、マルクス思想でもなく、宗教でもない。真の人間解放の思想とは、障害者自身の考えによる実践に違いない。（名古屋市・岡泉・高校生・18歳）

＊この雑誌はきっと永つづきしないだろう。何故なら、非常にまともだから。今の世の中に、このような精神が存在しつづけることはむつかしいからである。そして、今までそのような精神のもつ明るさ、透明なすっきりした気分を与えてくれる一群の人々を知っていたが、この五号により更に高いレベルの人たち、橋田さん、猪野さんを知った。しかしこういう方向は、今の世の中に一流出版社の出す立派な雑誌としては進みつづけることができないのだ。きっとつぶされる。つぶされる。十号まで出せるか？（横浜市・会社員・35歳・男）

★相互批判

＊五号、横浜の23歳の男の学生さんよ！　ワテは岩田氏の一文を読んいないので一方的な「けんか状」になることを承知で言うのだが、オメエさんが「教育問題とは社会問題の一つであり、七〇年安保は単なる一つの政治的条約の問題であった。この意味において挫折も敗北もあり得なかったのである……勝利が可能な時において初めて敗北もまた可能となるのである」と、どこかで読んだ風なことを、羞恥を知らぬ無能な管理者のようにしゃべり始めるのを聞くと、きいた風に「安易に語って」くれるなと忠告もしたくなるのですよ。オノレの言葉で語ることこそ「己の体験の核を見出す」初歩的な作業ではないんかな、と。

ワテはいま運送屋の現場で極めて即物的な「労働者諸君」と肩を伍して汗水流しているのですが、「労働力としての価値、消費するものとしての価値を喪失したと資本が判断した時に初めて見捨てるのであって……あなたが資本主義を捨てることなぞ出来るわけがない」と23歳の青ちゃんは説教して下さる。資本の収奪と搾取に骨までさらされていながら、なんでワテらが女の子でも捨てもしくは捨てられるように気楽に資本制社会を手玉にとることが出来ましょうや。少々言葉は古くなりますが、かつてはやりのオンネンとかウラミツラミでもって資本制社会にくらいつき、この社会が断末魔のサケビを上げるまでではその手をきつくすることこそあれ、なんで捨ててなるものでしょうか。ケンカ、高松の地まで買いにきますか、23歳の男の横浜の学生さんよ！（高松市・堀内正夫・作業員・31歳）

＊五号の横浜の23歳の学生の方の批判、それはある意味で正当でするどいのですが私には何か納得がいきません。……宙ぶらりんとか徹底性の欠除とか、あなたはたいへん鋭く状況をとらえているようなのだが、

実はあなた自身がたやすく達観しているのではないでしょうか。この時代は「先が見える」ほど単純でないと言いながら、あなたはこの時代を生きた青春を、自分が参加するのではなくて眺めることで批判しているように思えるのですが。……

個人的には徳丸氏とも岩田氏とも面識はないのですが、彼らが彼ら独自の体験によって変っていった、それはやはり「青春のいま」であると思います。私自身のことを書くなら岩田さんと極めて近い状況にあるかも知れません。教育の変革には長い地道な努力が必要であることに異論はありませんが、私は選別の機構からはみ出すことによって、機構自体に影響を与えうると考えております。もちろん私一人が大学を拒否したからといって、何も変わるわけではありませんが、選別＝差別に対する反抗は、選別される側の一人一人が「ノン」ということから始まるのだと思います。その意味で、学生であるあなたは自身の立場をどう考えるのかを示してほしいと思います。（田無市・清家徹也・無職・21歳）

★学校生活

＊去年の一二月で高校中退いたしました。どうしても自分のためより、世間的な立場確保のために通い続けている様な気がして……

止める時、事務所へ独りで行って、「止めたいんですが」と云うと、「は？」と顔を見て「ちょっと待ってね」……三〇分で「はいどうも、もういいですよ」でした。中学から五年間余り通い続けて……校門を出ると何だか自分自身の存在がかげろうみたいにぼーっとしていたのだと想いました。自分で選んだものの、妙に侘びしい気がしました。もっとも私の場合、割り切って登校し続ける事が出来なかっただけですが……。

これからどうやっていけるか、考えてますが……大きな歯車の中での自分の存在を考える度に、ひどく気がめいって来ます。現在のところも時間ばかりが過ぎて行きます。

終末から……を読んでいると、漠然と何かが私に迫ってくる様な気がします。一生、〝井の中のかわず〟で終わりたくないのですが、出来る事なら、愛するもの達と〝倖せの日〟へ逃げ出したいです。先日も四国の故郷へ帰りましたが、何もかもなくなってしまって……変わらなかったのは、やさしい祖母だけでした。川も、カニも魚も、裸足で駈け上がった土手も、今は冷たいコンクリートの下になってます。（神戸市・山根可枝）

＊大学受験か。フーッ。誰を呪えば良いのでございましょう。二度とないと言われてきた青春（ああなつかし）を二年間も浪費させられて、受かれば人生必ずバラ色と信じさせられ。（ナンセンス!!　ヤメチャエ!!）そんなこと、参考書に書き込むだけで、とても恐ろしくて実行などできません。勇気がないんです。割り切れないんです。へらず口たたきつつ、親にすがっていたいのです。本当にだらしがないんです。（今ぼくは劣等感でできている。そして一生。）それなのに冷酷無比なわが親は「三浪サセロ。働ケ！　オクニノタメニ」「でも僕には、農学部を出て救世主になるという大きな仕事が課されているんだ！」と言ったものの、「二年目デトウトウ狂ッタカ！」。今はただひたすら、総ての価値体系の崩壊をもたらすという終末を待つのみ!!　僕が悪いんじゃ絶対ない!!（試験までにあと11日）（東京都・秋津薫・無職・20歳）

＊先日、卒業させられる（？）ために追試験を受け、どうにか合格させてもらったらしく、三月には三年間憎みつづけた高校（先生あるいは校風第一の帝国主義的教育、そしてオレをバカにした、『終末から』をも知らなかったガリガリヤローども）から、やっと解放される。

しかし四月からは、角栄がかわっても大学制度は変わりそうもなく、オレを待ちうけているだろうカサハリ生活。それでもオレは『終末から』をかかさず読み続け、終末から真実を見きわめようとし、社会の矛盾にならされない人間になりたいと思っている。

ところで近頃は気候のせいか、石油危機のためか、それとも『終末から』の影響か、少なくともオレンチの上空に晴れた日には星が輝きだしたのだ。これはすごいことなのだ！自分の家で星なんて見たのは何年かぶり。もううれしくて毎晩寒いのに窓おっぴらげて夜空見上げてるのが、今のオレの唯一の楽しみなのだ。（北九州市・福本弘樹・高校生・18歳）

＊ああああーっ、もう高校なんてゼッボー!!　滅べ！　あと十日で大学入試。教師になんてなる人の気が知れない。泥棒の方がマシですよ。もう二度と見たくない、あの校舎、あの教師や同級生のツラ。どうしてくれるんだ、私の三年間は無為に終ってしまった。いや、そんなことはどうでもよい、この悪夢を忘れてしまえるならば。

大学に入ったら、私も新潟の先輩浪人の方のように、京都で『終末から』を読破しようと思うんです。そ

れを思うとかすかなる希望が湧いてまいります。先輩、頑張りましょうね、ラストスパート！

第六号は私の誕生日に発売だそうで、楽しみでございます。良いバースデープレゼントになることでしょう。（青森県・芳賀三枝子・高校生・17歳）

★感想さまざま

＊二月三日のラジオのニュースでタイ国に運河を作るのに核爆発を利用する計画のあることを知りました。日本の日商岩井とアメリカがそれを進めているらしいのですが、非常にソラオソロシイものを感じました。……私の気になったのは、それをタイ国で行なうということです。タイ国が実験台になるのです。日米企業によって経済をメタメタにされた国で、こんどは日米によって国土、大気をメタメタにされようとしている。この計画が実現されると、日本の商社は原爆まで貿易するわけです。（松山市・椚田一文・学生・22歳）

＊こんな本売れるのかと思って、創刊以来読み続けてきました。ぼくの本棚に、創刊号から順番に揃って行くのが楽しみです。表紙をじっと見ていると気が滅入ります。こんどはもっと明るいカンジにしたらどうでしょう。漫画や絵が多いのもよいことです。いつまで三八〇円でいられるか楽しみです。政府からにらまれるようになったらおもしろいです。こういう変な雑誌をつくる人がおり、読む人がいたということが歴史に残ることがうれしいです。（相模原市・上野猛・学生・18歳）

＊号を重ねるうちにどんどん面白くなっていく。というのも世相がずんずんグロテスクになっているせいでしょうか。（名古屋市・木村宏・無職・25歳）

＊「ただ今、日本国中の各地に、シラケ鳥が発生中、発見したならただちにうちおとしましょう。」

「シラケター、シラケター」またもやシラケ鳥が飛んでいく。昨日も今日もまた明日も。一羽、二羽、三羽、四羽……いつのまにか空一面。そのあとには、ミジメー「ミジメー、ミジメー」と啼きながら旋回している。

「現在、日本各地に大量のシラケ鳥とミジメ鳥が発生しています。皆さま、ただちにうちおとしましょう。」

そんなこといっても、「国民の皆さま」はシラケ鳥とミジメ鳥がいとおしく、誰れとてそれらをうちおとすことはなく、なかにはエサを与えて家でかうやつもおり、また事業として大量に繁殖させて金もうけするやつもいる。

そうこうするうちに、空を見上げても目に入るのは、シラケ鳥とミジメ鳥の大群だけ、ビッシリと空を埋めつくしている。太陽の日差しさえも見えやしない。（和歌山市・吉田敏朗・学生・23歳）

＊とにかくおもしろかった。これまで文春、中公、浪曼等、いろいろ読んでみたけれど、何かもの足りなかった。しかし今回「終末から」を読んで、やっとさがしていたものがみつかった感じ。特によかったもの①吉里吉里人②特集「私からはじまる……」③ずいひつ④虚虚実実。しかし特集の中の「いついつまでもおともだち」これはよくなかった、おもしろくなかった、わからなかった、他がいいのに、これがあって残念。

だけどとにかく満足！　人にもさっそくすすめた。これまでのありきたりの雑誌とは違う、何か考えさせるものがある。（名古屋市・伊東勝・地方公務員・23歳）

＊青森県六ケ所村、ここでは今信じられぬような、というよりは信じたくないようなことが起っている。それはむつ小川原開発と呼ばれるものである。村内の土地は買いあさられ（それも協力家庭に奨学金を貸すとか、村の有力者からの圧力でといったものがほとんどを占める）、しかも土地を売った六〇％が売らねばよかったと言っているのである。私は去年の夏、開発反対同盟をたずね、「なぜ反対するのか、なにに反対するのか」ときいた。その答えは、「線引きに反対する」というものであった。どこかの誰かが机の上の地図に書き込み、それを実行しようとすることに反対するというのである。住民のタッチしない開発などというものは存在しないというのである。このような文を書くと、「そんなこと日本中で起っているよ」、と言われるかも知れない。しかし、それがそもそも重大な問題なのだ！（東京・大向富美郎・学生・20歳）

＊決してすっきりすることのない、いろいろなことが世の中を構成していて、私が私であり、私が私でない、というような、そういうそらごとが、私の内から出てくる。いつのまにかポロポロ欠け落ちている「なにか」に気付かぬフリをする。もうどうでも良いのサと言ってみる。だけど私は……どうして生きる、生き続けるのか。ふと考えるフリ、なにをすることもなく、いつもなにかしたい、と。（和歌山県・前窪弘子・19歳）

＊号を重ねるごとにこの雑誌の方向が明確になってゆき、本を開く前の

期待が失せてゆく。それに平行して書き手のパトスも。集沫辞解も「あ」は「こ」よりおもしろかった。……ぼくは創刊号の乱雑さと活力が好きだ。焼跡なんておもしろかっただろうな。（東京・吉田隆・予備校生・20歳）

＊『終末から』をこわきにかかえたミニスカートのねえちゃんや、ジーパンのにいちゃんが、バクダンをかかえて歩いているように思われるまでてっていすべし。そして国家権力、大企業からPTAのババアども、そしてそのポストたるかまとねえちゃんにいたるまであわふかせてひっくりかえすのだ、するとニッポンは終末になるのだ、ウレシー。（宮崎市・鈴木隆文・学生・21歳）

＊当方も学生生活（収容所生活）の終末にあたり貴誌を購読している次第です。今の時代は終末か来世への入口かどうかはあたしには関係ないことで、だらだら生き伸びるばかりではありますが、終末教元祖たる野坂師はじめ諸師が気張ってるうちは終末はとうてい来そうもなく、来世が開けるばかりじゃございませんか。終末からという雑誌であるなら、もう少し力を抜いて編集なさったら如何。（新潟市・永橋正伸・学生・23歳）

＊一、二号の批判精神が、三、四、五号と弱まっている。これじゃいつ発売禁止になるのかと心配してたのが、バカバカしいことでした。うまくちくまさんにのせられてしまったようですなあー。マイッタマイッタ。これからも読むぞォー。（東京都・財津正義・学生・20歳）

＊この欄を読む限りでは、ぼくは極めて消極的な読者であります。ホントウの事実を知り、筆者と共に現実を嘲笑ってやることができるだけで、今の所満足しているのです。本当は、何かしたいのですが、この現実という暴力の巨大さにぼく一人で何も抵抗できるわけでなし。ならば、集団で、といったところで、そんな組織はどうも……。とにかく、今は、事実と、現場の人の発言をスナオに聞いていますよ、スナオに、ネ。（男・18歳）

＊日本芸能の源をたずねて、大道芸や替女歌などの特集をやってほしいと考えておりまス。彼ら芸人たちの、乞食者、悪所者と、一般市民からはさげすまれ、陰の日本でしたたかに生きてきた生きざまを通して、もう一つの日本をたずねてみては如何でしょうか。オートメ化、インスタント化された現在の芸能に活を入れるべく、手づくりの芸というものがどんなものか知りたいと考えます。（東京都・宮崎裕喜・自由業・26歳）

＊人間の真の解放は、ヒトにかえることである。（町田市・森本堕良・無職・20歳）

＊野坂さんの小説がのっていたのと題名が気にいって買わせてもらったのですが、赤瀬川原平氏がなんてったって気にいってしまい、毎日毎日読んでいます。赤瀬川原平氏はとても良いのでして、みんな獄中記に注目しましょう。（札幌市・永盛康子・高校生・17歳）

＊零の世界は果してあるのでしょうか？　マイナスの時間は果してあるのでしょうか？　性こそ悪を生み出す一つの大きな根源であると思考するのは偏見なのでしょうか？　小さな一つ一つの悪の集積が、権力というものを生み育て、繁栄させているのではないでしょうか？（宮崎県・柳田治嘉・土工・32歳）

＊文明（人）の終末を人類の終末と混同してはならぬ。文明の恩恵に飽食したノサカらが何をほざこうが、滅びるいわれのない者、生き残らねばならぬひとびと、文明（人）に復讐し撲滅すべき部族が厳然として存在する。それが「義」というものである。（豊中市・川見豊・業界紙記者・33歳）

＊五号の編集後記、原田さんの発言には、まさに僕たち学生の急所をさされたようで、まことに感服しました。原田氏のいうそういった青年たちが続出しているようで、僕はその青年らに厭気がさします。世をすねたような生き方をしているように発言しながら、実際はその反対を生き、そうした虚言をはいて俺はおまえらと違うといったゆがんだ見栄をはり、ひとりでいちびり続けている人々、僕はすくなくともそういう人にはなりたくないと思います。（西脇市・来住尚登・学生・19歳）

＊「吉里吉里人」と「櫻画報」を愛読しています。その他の記事は中途半端な環境白書？風で面白くない。軽薄かつ不まじめに終末を扱うのが、事の本質を知ってさめている庶民の感覚です。（田無市・笹田一・学生・23歳）

高木修二・20歳・尼ヶ崎市

＊『終末から』よ、お前もかと恐る恐る第五号を手にした僕は380という数字を裏表紙に見つけてホット胸をなでおろしました。……紙不足もいいけれど、ぼくだって金の方が不足しっぱなし、何でも上げればすむという発想に『終末から』はイチャモンをつけてくれました。（長野市・福原政一・学生・21歳）

＊生まれおちたときから白けていたこの世界を確認し、この世界に包容されつつ包容し返し、白けた宇宙自身になって進まねばならんのだ。睨みつけてくる目、とがめてくる鬼の目を、はねのけ、切りかえし、殴りつけつつ進まねばならんのだ。白けた行為の最たるものと知りつつ前進する困難さ！と偉大さ？　刹那的とも見えるこの行為の悲喜劇性の中にこそ、存外な真実が見出されるような気がする。『終末から』の存在理由もここにあるとぼくは信ずる。（東京都・室田芳郎・学生・20歳）

＊どうも、誌面が安定してきたみたいですネ。こうなってくると、ま、色々不満も出てくるわけです。それぞれの内容はどれも読みごたえは一応あるんですが、「ガーン」とくるものがなくなってしまったようだ。これは我々読者の方の感覚がマヒしてしまって、より強い刺激でないと反応しなくなっていることの反映でもあるわけやけど。まずデータ……つまり終末を暗示するような……が皆無になってしまったこと。自分が知らん所で、どないなっとおるんやろということが知りたいわけです。

さて五号の内容ですが、「絶望的医学相談室」がますます冴えわたってきたという感じで、僕なぞワクワクしてしまっています。……読んでいて、何かやってる人というのがうらやましくなるのですが、自分もキッカケがあればきっと立ち上がるだろうという気がするわけです。（東京都・岡本哲夫・学生・20歳）

＊編集後記にあった「事実を事実として見ること」ということばが気に入ったので書いてみました。……今年、うちの大学に環境工学科なる、公害のための学問をするというような印象を与える学科が新設され、北九州のド真中にこういう学科ができるのはとても意味があり、北九州の公害にとても大きい役割を果たすみたいなことが伝えられてくるのですが、事実は全くそうではなく、単に将来博士課程新設のための学科増設にすぎず、環境工学科に予定されている教授たちというのも全くいい加減なもので、これまで自分のしてきたことに対する捉え返しもないまま、これまで通りの研究をつづけていくという。何人かが集ってやっていれば何か出てくるだろうくらいの意識しかもっていない。やっぱりこれも事実が事実として伝えられていない一つの例で、こうしたことは身の回りにいくらもある事なのです。我々はあくまで事実を事実として伝えていきたいし、それを自己の存在の証としたいわけです。権力が重くのしかかってこようとしている今こそ、事実を事実として伝える重要性を感じるのです。（北九州市・石村和寿・学生・20歳）

＊毎号読むたびに、今のままではいけない、と考えさせられます。しかし、次に続くことばは、どうしたらよいのか、と、いつもここで終ってしまいます。（碧南市・杉浦浩・会社員・21歳）

＊俺がこの本を読むのは、別に何があるわけでもなく、エロ本より「おもしろい」からです。きっと誰も危機感をもってこの本を読んでいない。一つのブームなのです。ブームにのっかって出たのか、危機意識から出たのか、その辺がちっともわからない本だけど、読む人が意識を高め、行動を起そうなんて思ってないだろう、この本読んで……。中にはまじめに、「これはいかん」と思ってるのもいるかもしれないけど、ま、多くはブームに乗っているだけでしょう。そして、それを脱却するだけの気力がない。……（北海道・鈴木賢有・教員・23歳）

＊「オーイお母ちゃん！　紙が悪くなったよ、ホラ……」「あーれ、ほんとだアー、でもぶ厚くなってるよ」「そうかなァー、内容が濃いならいいヨなァー」てな訳で、紙の質が落ちましたね。でもいいですヨ、あれだけの筆者が並んでるんですから許してあげましょうね。四号から読んでるヨ、二冊目なんだ、三八〇円は大金だけどどういうわけかまた買っちゃった。なかなかおもしろい、だけなら買わないけど、「好き」、なんとなくね。私、天皇大嫌い！だから四号のタイトル見て買っちゃったの。私すごーく死にたかったの、今でも……だから五号の〝生きる理由、死ぬ理由〟ってのが目に入って買っちゃったの。もうこれから買うのやめようと思ったけど、紙の質が落ちたのを見て、また買おうかなーって思うの。だってイヤミじゃァないけど、『終末から』って本は、紙の質落した方がずーっと本の内容が生きるみたいな気がしてきたもん。ガンバッてよ、筑摩書房サン！（名古屋市・久野昌子・学生・20歳）

＊谷川雁が考えていたような全国交流誌にしてほしいと考えますが無理でしょうか。ブル新、いや、社会新報にも赤旗にも公明新聞にものらないような記事をのせて下さい。なぜ隔月刊なのですか。週刊を！（福岡県・公社員・男・40歳）

＊終末論は週末論とすり替えられ、不景気は石油が放火魔、火事場泥棒横行し、泥棒に同調する企業や政治。……終末から終末へ移行してもよい世の中になって貴誌も本懐であろうと想像する。冥い地下街を逝く半死人を代表して終末へ導きたまわらんことを、南部四十二寺に願をかけてお待ちしています。（大阪市・伊藤輝宜・地方公務員・37歳）

＊どこかにひとつ目の国があって、地球という星にはふたつ目の怪物が住んでいるんだそうだ、なんぞと話し合っているのではなかろうか。ふたつ目の奇形を思っただけで嘔吐を催すような、感受性の鋭い、かなりセンサイな生きものに違いない。（と思ったりする）

怖ろしい。ひとつ目は奇形なんだと、何気なく思ってしまったりすることが。ワタシコソキケイナンダメガフタツモアルナンテ

要するに、多いものが本ものになってしまう世の中です。（国立市・牧野玲・19歳）

＊エネルギー不足が大きな問題になり、公害のかげがうすくなってきたようです。物がなくなり、物価があがり、持てるものだけが大きくなっているのです。自分だけは、という気持がすでに精神の終末を通りこしています。怒ることを忘れ、ただこの寒風の中で小さく丸くなっているだけなのです。怒る相手をはっきり確認すべき時です。（自分自身をも含めて）

〈終末〉が来るべき時です。日本沈没ではなくて日本滅亡か。（広島県・フリーカメラマン・男・26歳）

＊鈴木志郎康氏の上山老人の死についての文章が、何よりも私をひきつけた。みな何だかんだと言いながら、結局うまく立ち回って生きていくのだろうし、貴誌も「破滅だ」「終末」だと言ってもそのことばを信じていず、「反乱」「変革」で解決を提示しながら、うまく世の中を渡っていくのでしょう。……多くの人は（私を含め）社会の内であれやこれやわめきながらも、ていよく内部で位置しているのに対して、社会から拒絶され、もしくは社会を拒絶している人の存在は、絶望的なだけに、それだけ私をしたたかに撃ってやまない。私も上山老人の様な生き方に近づいていきたい。それこそが、残された唯一の「自由」だ。（東京・男・20歳）

＊ふたたび二か月がたちました。いつものように書店へ買いに行き『終末から』をみつけました。うら表紙を見るといままでとおり三百八十円だった。私はうれしくなってすぐ買った。他の雑誌は上っているのに上っていないのです。ところが家に帰ってみると、紙の質が悪くなっているではありませんか。定価が上っていないはずだと思いました。

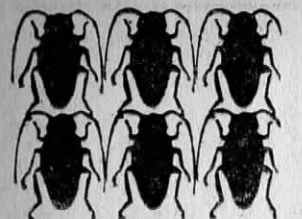
ところが「美しい明日」では、お金のかかりそうな紙が約三十頁ほどもあった。それで私は、さすが筑摩書房だと思いました。

ところで内容のほうですが、だんだんまとまってきたような気がします。しかし私は、この『終末から』が出るかぎり買うでしょう。なぜならこの雑誌が私の思想にいちばん近いと思うからです。（京都市・細見誠・中学生・15歳）

＊創刊号を読んだとき、この雑誌、いつまで続くだろうかと思った。……気ままに立寄った本屋で、新しい号が出ていれば「おっ、まだ続いている」というれしさでチュウチョなく買い求め、とうとう五号まできた。時にはまったく下らぬ文章を読まされ腹を立てるようなこともあるが、総じて感心させられ、感激させられ、刺激され、ユウウツにさせられる。（京都市・学習塾講師・男・29歳）

＊終末感漂う沖縄から、甘い夢を求めて大和へ、挫折の中に心を沈ませている一若者です。すっかりいじけてしまった僕に開き直るふてぶてしさを教えてくれた心情すこぶるアナーキーな『終末から』。東松照明さんの「こだわりの旅」、大和人があんなに主観的に見れるの、驚きと同時に、そのものずばりの代弁に思い得て、なぜかしらちっぽけな島ナショナリズムが首を出してきます。……でも考えてみると、終末感を現実に味わったのは、七一年のVX、B6等の、コーラビン一本で、島をこわさずに抹殺可能な毒ガス移送の、あの長い夏。でも、天命論的発想の沖縄の人間には、科学兵器にも無思考だったかも。（京都市・石原孝雄・運転手・22歳）

＊かつての新左翼的においをかがせて、それでちょっと気どっているみ



高馬三博・24歳・川西市

たい。東にモメ事あれば行って一緒にさわぎ、西にけんかがあれば見物にといった感じのしないでもないのがちといただけない。記事に見られるのは、つまるところあの女はいいね、あの女はブスだとさわいでいるだけで、女が好きなことにかわりない。つまり体制そのもの好きなのは変らず、あの現象は素敵だとか、この事象はみにくくて許せないと一所懸命力説してるのはいいけれど、気どりがのぞくのがいただけないのです。ただ、あまり著名と思われぬ人人の文にお目にかかれるのがいいところかも知れませぬが。（市川市・砂見邦夫・運転手・28歳）

＊これで三回めだから、もう掲載されてもよいだろー。今中学三年生、某大学付属高校美術科に入れたら入りたいなーと思ってます。第五号読みました。まーまーおもしろいのではないでしょーか。やはり雑誌はむずかしいこと言う以前におもしろくなければいけないと思います。落語みたいのと連載小説みなよかったです。「吉里吉里人」はわたくしの数学の先生が大好きです。続けてください。最後に一言、いたりやまたんき。（東京都・木村裕美子・中学生・14歳）

＊感激のあまり、愛用している猫までも殺しちまいそうです。一頁一頁ぞくぞくする様な何とも言えない恍惚感にひたりながら読んでおります。やっと私にピッタンコの雑誌を見つけたのですから。おまけに、己れの無知なるを、断片的ではありますけど、自覚させてくれたありがたーい雑誌なのです。（広島市・牛尾孝子・高校生・17歳）

＊創刊以来読んでると、チョッとしたギモンがわく。編集部氏は、この本の読者層をどんな風にとらえているんだろう。何か、すっごく左翼全体主義的色彩が濃いみたい。モチロン全部じゃないけれど。でも僕の回りでこの本読んでる人、僕も含めて殆ど全員 individualist なのです。学校の政経部（左、大体日共系）なんか、誰も読んでないみたい。なのに「どうも……」にはすごい左翼的意見が多いように思え、それがギモンだ。マサカと思うけど、思想サ別なんかしてないでしょうネ。（猪股敢児・高校生・18歳）

＊いつ、出版文化の虚名による手前勝手な廃刊理由（創刊理由と同様に）のもと、あっさりと後ろを一顧だにせず消えていくかと、泡沫文化の象徴たる「貴誌」の場当り的な目次が楽しみな二か月のサイクル。こうした視点に多く読者が立っていることを知った上で「どうも……」なるタイコ持ち的スペースに読者の一切の反応を体よく封じ込め退けてしまうところなど、美濃部の「ゴミ箱を床の間に」的強弁より質が悪い。……所詮、終末に立ち合うことのない己の「終末」への宿命を得心して、もっとオオラカになったらどうだろう。深刻に考えてもしょうがないからね。挫折から新たな居直りの方途を摸索している私たちからするとどうも遅れているようだよ、貴誌は。（仙台市・富岡妙恵・学生・21歳）

＊読んで立った腹は、一体どうすればおさまるのか。この点が、今私にとって最も大きな問題です。（京都市・越智田吉生・学生・23歳）

＊「吉里吉里人」の他は読む気がしません。特に今月号はおもしろくありません。吉里吉里語はいいですね。標準語なんてない方がいいです。方言を大切にしたいなあ。そして、もっと恐しい本にしてもらいたいと思います。（駒ヶ根市・小沢恵子・高校生・16歳）

＊物価高騰、公害、野党議員のだらしなさ……このような世界に告発するすべを知らない小生に至っては、居酒屋にてニコヨンのオヤジをつかまえて雑言を繰返すのみであります。そこに『終末から』なるヘンテコリンな雑誌が出現、たちまちそのミリョクにとりつかれ恋人もほったらかしで読みふけってる次第。今後もこのゆがんだ社会を大いに告発していってほしい。（葉山町・金城宏孟・自営・31歳）

＊実は友人に貸したはずの三号が、突如として消え失せてしまったのです。血まなこになり騒ぎ立ててさがしましたがないのです。だから明日（2月1日）本屋さんにバックナンバーを頼むことにしました。三八〇円の支払いは痛いけど、このまま三号が欠けてしまう方がよっぽど痛いのです。この紙不足の折、「そんなもんあらへんで」と言われないかと、内心ビクビクしております。（大阪市・津田久美子・学生・18歳）

＊創刊号からくらべて、だんだん公害問題が少なくなってきたみたい。これはよくない傾向。反省してね。インフレーションの激しい折、三八〇円でがんばってね！（千葉県・服部修一・高校生・17歳）

＊だんだん号を重ねるごとにつまらなくなってゆきます。新聞を見てる方がよっぽど終末的で戦慄を覚えます。（東京都・相馬正男・高校生・18歳）

＊全く他に類をみないおもしろい娯楽雑誌！　どんな手づるでこんなおもしろい話を仕入れるのか、とにかくおもしろい。見開きの目次をあけると、圧倒されてしまっちゃう。

『終末から』なんて気どった名前がまたいいね。ちょっと紙質が落ちたけど、こりゃしょうがないね、いまのご時勢じゃ。（小千谷市・品田則夫・高校生・17歳）

＊今年こそ傲慢な奴になってやろうと俺は突然思った。これからは会う奴ごとに「ガキだな」「甘いねえ」とセセラ笑ってやる。前みたいに、「わかるよ、そうなんだよ」なんてこたあいわない。まず出会った貴誌に、「甘ったれんじゃねえよバカ、何が終末からだ、華やかな表紙、上質紙、安価、分厚さ、ゴーカじゃないかよ、終末を売りものにするんだったら定価一〇〇〇円ぐらいにしてザラ紙のペラペラにしやがれ。それになんだ編集後記の石井のバカがゴキ（五木寛之）なんかにまどわされやがって、リズムが何だ、……男だったらあんな女にもてる（チクショウ!!）ヤローの話なんか聞くな」とまあ……スッとした。傲慢てことはなんて気持がいいんだ。コセコセウジウジのマゾヒスティックな気持もいいけどこれもまたいい。万国の若者、オゴリタカブレ、心やさしき若者共サラバダヨ。（大阪府・福本義裕・学生・19歳）

佐久間文男・25歳・東京都

＊今まで五回にわたり本誌を読ませてもらったが、もう一つピリッとした所がない。なぜかと思うに、スポーツ、芸術に関する考察がないということだと思う。この二つのものがプラスされたならば、いっそうこの雑誌はよくなると思う。それは破滅と創造の両極端からものを考えることであります。破滅なくして創造はないし、創造は破滅へつながるかもしれません。（東京都・坂本文彦・サラリーマン・26歳）

＊今回で第五号というわけだけども、わずかのうちに、まるで風化したミイラを掘りおこしたように、あっという間もないほどのスピードで魅力が失せていくのはどうしてだろう。当初は本当に面白かった。誰かが書評で「筑摩がこんな雑誌を出すとは思わなかった」と言っていたが、しかし今はどうだろう、やっぱりえらい出版社の出す本らしくなってきた。……もっと軽薄な本でありつづけてほしいのです。（岩手県・小野寺淳・地方公務員・18歳）

＊どうして日本人とはこんなにオッチョコチョイで軽薄なんでしょうね。すぐ感情的になったり感傷的になったりする。ハイセーコーやソルジェニツィンを擁護するのはかんたんですよ。また実際それは正しいでしょう。でも正義感にはいつも判断力が必要なんです。それだけの正義感があるのなら、もっと暖い目で見なければいけない人は世の中にいくらもいるんじゃない？　例えば新聞の社会面で、さんづけで呼ばれない人とか……

彼らは負けたハイセーコーや祖国を追われたソルジェニツィンには最高に優しくなれるくせに、いったん犯罪者となると恐ろしいくらいに残酷になれる。彼らにはかわいそうないい人はいるけれど、かわいそうな悪い人はいないのだ。（東京都・稲葉六男・自由業・23歳）

＊……

トウチャン会イタシ
カアチャン恋イシ
トンチャンニンニク目ニシミル
シミルマブタニアノコガ映ル
ミヨコワロウテコチラヲ向ケバ
暗イ心ニ灯ガトモル
ナンデ故郷ヲステタノカ
ナイテワロウテ涙ニオボレ
オイラバカダヨウラミ節……
バチンコトルコニヤスサカバ
黒イウスマク下界ヲステテ
ナニカイイコトアルカシラン
ステルコトニハナレテルオレサ
故郷ヲステタ女ヲステタ
コノゴニオヨンデ何ステル……
ステルモノナドナイオレニ
何ヲステロト言ウンダイ
ミツケタ百円手足ヲノバセバ
ペプシミリンダラッキーキャップ
ヒロウモノサエナイオレニ
何ヲステロト言ウンダイ
ミヨコ恋シヤ恋シヤミヨコ
ミヨココノ春十八十九
トナリノ村ニトツガバトツゲ
東京ダケハクルンジャナイヨ
ココハオイラノハカダカラ
ソレデモ来タイト言ウノナラ
セメテ故郷ノ花イチリン
セメテ故郷ノ草一本
カザッテオクレヨオイラノ胸ニ
ノセテオクレヨコノテノヒラニ

（愛知県・大西潤・浪人・19歳）

＊普通雑誌は、買ってきたその日目を皿のようにしてその日中に読んでしまうのだが、この『終末から』だけはチョクチョク長く読んでいる。創刊号ほどの緊迫した感じはないにしても、編集のおもしろさと内容の充実はかなり評価に値すると思う。紙不足だといって、新聞のページ数

は減らしても広告だけはデカデカしてるのとは大違い、紙不足だからといって、ペンを減らすことないのだ。トイレで紙をケチルことだってやめよう。たっぷり使って気持よくなって、すっきりした頭でもっともっといろんなことを考え、書いていこう。（北九州市・井丸秋・失業女性・24歳）

＊初めて五号を読む。晩の惣菜の買物帰りのことである。主婦の性的不満を、消化剤のごとくみごとに消し去ってくれるものだろうか。「イヤー、甘い甘い。」さっさと自分の甘さを打ち消して、「イライラ、ギリギリ、ムシャクシャ……」を「終末」読んでなお高め、せいぜい爆発させて前進前進。車だってガソリンの爆発で前進するんだもの！（福島市・田村桜・主婦・27歳）

＊編集者の皆様に一言申し上げたく思い筆を取りました。あなた方は何を考えておられるのですか。「終末から」で、もうあなた方編集者と作家とを含めた皆様は終末に達しそしてその終末の時より我々読者に我々から見れば予言であるあなた方の暗示を与える。読者はいかなる行動を取ったら良いのだろう。社会批判、暴動、革命、そんな行動は我々の社会的地位、名誉などを奪い去ってしまう。特に学生にそんな行動は許されない。いや許されてはいけない。そして同時にその禁断を破った時に人はその学生を学生とは呼ばなくなるだろう。立派な犯罪者、現実には退学という二字が重い鎖のようにのしかかってきて、禁断の実を食したが為に楽園より追放されアダムとイブのように学校という名の楽園からみじめな負け犬として追い出されるのだ。あなた方編集者は貴誌を世に送り出した後社会的影響、特に我々学生に与える物の多大なることを考えて見たことがあるのでしょうか。もしあなた方が何も考えずに貴誌を編集されているのなら、公害をタレ流しにしている企業と同じように悪を世にはびこらせる源ではないだろうか。（秋田・岡田昭弘・高校生・16歳）

＊忘れぬうちに。七四年四月の日本畜産学会に注目して頂きたい。東北大の星野忠彦助教授が重大な発表をするはずです。内容はブタのエサの中の添加物のことで、現在ジストロフィーに似た症状の豚がそこいらのスーパーに出回ってる（たいていの店にあります。PSE Pork という）のですが、その原因はエサの中のある物質なのです。そして、それは発ガン性もあるのです。（仙台市・坂田隆・学生・22歳）

＊「新生」

もうぼくは抜けだすよ今から
良いものを見つけたんだ
なんてぼくは利己主義だったんだ
自分だけで薄々してたんだ……
ぼくはデランネもニヒルもアバン
　ギャルドからも脱けだすんだ
美しいものを見つけたから
ぼくは正常になるんだ
きたないものはやっぱりきたない
　んだ……
ぼくはきっと脱けだすよ今から
怒れるものを見つけたんだ
なんて社会はひどいんだ
ぼくは絶対たたかうよ……
ぼくは脱けだすよそこから
人のことを考えるんだ
なんてぼくは弱虫だったんだ
自分のことばかり考えてたんだ……
何よりも人を愛することそして信じること、そこから人は始まるんだ。ぼくはぼくの新生を信じる。そしたらぼくはもっとよくなるよ。みんなも新生しよう、そしたらみんなはもっとよくなるよ。（神戸市・柴田冬吉・高校生・16歳）

＊私は二十八歳の労働者です。日本語を一ツでも多く知りたくて本屋さんに国語辞典を買いにいきました。そこで『終末から』と言う本が目に止まりました。〃特集私からはじまる反乱〃と表紙に書いていました。今まで本を読むといったら、「週刊実話」か「コミックマンガ」ぐらいしかないのです。なぜこの本を買ったかと申しますと、共鳴する所があったからです。一本の矢は弱いが二本三本と重なり、行く末はネズミ算式になる事を信じて現実に行動してます。でも会社を休んだり、会社に不利益なことはいたしません。ただ余りにもむじゅんしてるからです。私は一人で一つの仕事をやり残業もし、相手は一人分の仕事を二人がかりでやり、時間も定時で終り、おまけに給料ときたら自分よりも三万円も多いのです。会社はあの人達はリンジだから、従業員が入社になり次第やめてもらうのだと言って私を納得させるのです。自分でそれが分っていても、人間の感情と言うものはなかなか割り切れないものですね。今の世の中誰かがトクをし誰かがソンをする世の中です。

この本には、世直しとか言って、とってもいいこと書いています。とっても参考になりました。多くの人に読んでいただきたいものです。

私は『終末から』を会社の人、又自分の周囲の人にこの本読んで見なとかして上げてます。

私の大好きな言葉、「人生はゴーイングマイウエー」

（沖南市・松尾史朗・労働者・28歳）

＊ぼくはつくづく日本てえ国に嫌気

がさして来た。そこでどうしようもないので、『終末から』という雑誌でも開くと「サヨナラ日本――」なんていうとてもさわやかなタイトルに引き込まれて、読んでみて、これがとても感動してしまった。なんてすばらしんだろう、と思いながら「時間なき人々」を読んでまた感動。まったく『終末から』というのはいい雑誌だと思いながら、ぼくの大好きな野坂さんの小説を読んだ。うん、結構面白いんだけれど、他の記事のすばらしさに比べると少し物足りないのだ。井上光晴氏も『辺境』休刊の時、小説がノン・フィクションの記事にくらべてちっとも良くないので、とか理由を述べていたが、小説は近頃どうして力をなくしてしまったんだろう。むかし『文学界』という雑誌に「衰弱の文学を排す」とかいう江藤淳と小島信夫の対談がのったことがあり、それは面白く読みましたが、どうして文学が衰弱しているのか分らなかったけれど、今日はじめて井上光晴さんの言葉を思い出して納得がいったわけなのだ。これはやっぱり、作家にばかり小説を書かせているセイじゃないかと思う。彼等は忙しく、どんどん書かせられるので、一人の人間にそういい小説を書いてもらうことは期待できなくなってしまう。だから、多くの人に自分の体験に根ざした小説を書かせると、いいものが現れて来るかもしれない。世の中は混沌としているし、そんな不快な気分を追っ払ってくれるような、いい小説を、ぼくたちは求めている筈なのだから。（北海道・川南稔・高校生・17歳）

＊「義賊現わる」

○日午前一時過ぎ、×区×町Mさん所有の倉庫に、ヘルメット・覆面姿の数人の男が押し入り、警備にあたっていたガードマンと格闘の末倉庫内にあった洗剤・砂糖などを、用意のトラックに乗せ運び去った……（○月○日　○○新聞）

という様な事件が起きないかと夢想している毎日ですが、果して本当にこの様な事件が起きたなら私達はどちらの側に立ちうるのでしょうか。日本という国の法律では、他人の必要な物をためて使わせないのは罪にはならないが、自分の必要な物を使うために持ってくるのは罪になるのでしょうが、買い占め売り惜しみ防止法などという選挙対策法ができても、商行為の持つ投機性そのものを私達はどう評価するのでしょうか。私達は一つの選択の時にさしかかっているのでしょうか。

『終末から』という雑誌が発刊されるのと時を同じくして、魚の汚染騒ぎが起こったり、石油危機を名目に狂気じみた物不足騒動が起きたり、現実の世の中が終末的様相を呈してきたようです。もしかするとこの騒ぎは『終末から』編集部が、雑誌の売り上げを増すため意図的に起こしたのではないだろうかとかんぐってみたりしますが、予言者ならずともこの状態は予測できたことなのかもしれません。日本の現在の状態を言いあらわすには、アジアの人々の非難の声を借りるのが適切なようですが、対外的にも対内的にも、日本経済帝国主義の行き詰まりが諸々の終末的現象としてあらわれていると言えるのではないでしょうか。

物不足騒ぎはある意味で資本主義の終末的現象と考えられるのですが、またある意味では危険な状況ともいえるでしょう。つまり物不足を理由に公害物質がまかり通るのではないかという危惧と、新しい全体主義が出現するのではないかということなのです。公害物質の問題に関して言えば、洗剤不足ということで石油系の洗剤が出まわり、自動車の排ガス規制が少しゆるめられたりしておりますが、このつくられた物不足ではなく本当の物不足の時代がやって来た時、非常に深刻な事態になるのではないでしょうか。

東南アジアの反日感情と資源不足に対した時、日本が新たな全体主義に進むのではないかという危惧は私だけではないでしょうが、もしかするともうそれは始まっているのかもしれません。戦前の軍国ファシズムは終戦とともに一つの終焉をむかえたと思われていますが、だが実のところそれは形を変えただけではなかったのでしょうか。軍国主義から経済主義に。日本人を表現する言葉に一億総――というものがありますが、ファッション的人間としての日本人も見逃せないと思います。ファッションは簡単にファッションに転化する可能性をもっていると言えるの

水俣病闘争の情念を刻む
「告発」縮刷版　続編
「告発」第二五号（一九七一・六）―終刊号（七三・八）／水俣病関係文献目録　A4判　二一〇頁
実費頒価一五〇〇円〒二〇〇円
「告発」縮刷版
創刊号（六九・六）―二四号（七一・五）
実費一〇〇〇円　〒二〇〇円
〔申込先〕
東京都港区西新橋二―八―一三
第一東京ビル　青林舎気付
「告発」縮刷版刊行委員会

ではないでしょうか。

これから『終末から』という雑誌が意味を持つとすれば、人類的規模の終末への考察と同時に、否それ以前に、私達が終末をむかえるか彼らが終末をむかえるかを考え、彼らに終末を送るためにがんばって欲しいと思います。彼らとは、私達に敵対し、私達を抑圧するすべての権力構造、それはある意味で私達自身の内にもあるわけですが、そういった諸悪のつくり出す終末的現象への戦いのためにこの雑誌が役立って欲しいと願うわけです。（田無市・清家徹哉・無職・21歳）

＊早いものですでに第五号になったわけです。そしてわずかな時間であったけれど、誌面にとりあげる内容、とりあげ方に変化があったように思います。それは暗い未来の暗示から、人間の強さ、たくましさが強調されはじめてきたということではないでしょうか。だから著名人の文章より、あまり名を聞いたことのない人の文章に感動するのでしょうか。ちょっとしたひとひねりがきわめて問題点を明確にし、問題の本質を鋭く指摘するということに気付いたのが、貴誌を読んだ大きな収穫だったような気がします。今後編集部に期待したいことは、編集部自身が足で歩いた記録をもっとふやしてほしいということです。その方が、著名人のことばを借りて主張するよりはるかに強力なものになると確信してやまないからです。（東京都・赤間徹・会社員・28歳）

＊人生七一歳ともなると我が里の将来のために何をなすべきかの課題を考えつつかつ実践せねばならぬ。わが里の特殊事情をふまえつつ、漁・農業と海水浴観光によって七〇〇〇人の里人が安定した生活をする道は決して楽ではないが、せめて自主独立の精神を昂揚する礎だけはつくりたい。七〇という年齢では遅きに失し、時間がなく焦燥感なきにしもあらずだが、初心を喪わずやり抜くつもりである。（京都府・北条秀一・会社役員・71歳）

★呼びかけ

＊自殺研究会を結成いたしました。つきましては、真面目（？）な読者の身近かな資料をつのります。特に自殺未遂者の御協力を願います。そのうち何らかの方法で発表したいと思っています。（潜在的死者の会広島グループ・広島市荒神町大幸ビル三〇六―安東博文・自由労働者）

＊全ての無煙者よ結集せよ！　心からたばこを憎み、たばこを吸う奴も心から憎み、煙を吹きかけられ、イライラしてもブンなぐりたい心をグッとおさえがまんしている人よ、われわれは何らかの団体を結成したいと思う。私たちにもたばこの煙を吸わない権利があるはずである。だからぼくはそういう権利を守るために、そしてこの島々の中では、そういう団体はまだ存在してないと思うので。とにかく「たばこすい死んじまえ、専売公社なんてつぶせ」。手紙待ってます。（常陸太田市宮本町四〇六―一五　木村勲・学生・19歳）

＊「教育を被教育者から考える会」会員募集

すべては、知ること（認識すること）から始まる。現在、社会がその含む地域性、特質、そして個人をむりやり画一なものとしようとし、すべての権力を中央に集めようとし、そのこと自体の矛盾につき当り、それでも進めようとしてあがいている状態にある中で、「知る」という作業は、むつかしいことである。

本会は、主に高校生を対象として、高校教育の実状を学校新聞、手紙等の手段により、高校生が高校生を知るということを大きな目標としたものである。今、会員であった高校生が卒業してゆき、切に切に会員の補充が必要となっている。『終末から』の読者の目の焦点には合わぬような文を書いておりますが、この短い紹介の中に何かが見えましたら、御手紙を下記に送って下さい。（京都市伏見区深草フチ町14ノ45　福谷方　松浦義和――学生・20歳）

編集後記

＊本誌創刊以来ここに六号を重ね、一年のサイクルを廻ろうとする。

「青年よ、ふたたび銃をとるな！」

「教え子を戦場に送るな！」

文字が血と泥にまみれ、破られ、へし折られたプラカードが、皇居前の道路にうず高く積まれた日、五二年五月一日、血のメーデー。私が筑摩書房に入社したばかりの日であった。自己の内的世界のほかには一切の関心を持たなかった私が、偶然目にしたその光景は、私の中で以後消えることがない。人間を踏みにじるものは何か。そのつつましい平安を奪う者は誰か。私の中に、怒りと問いはうずきつづけたのである。

その者は自らをこやし太り、一段と重く私たちの肉体と精神の上にのしかかり、ふたたびアジア全域に、汚染と涙と、そして血をさえぶり撒こうとはしていないか。

どうしたらいいのか。彼の存在と振舞いを前に、私たちはなおいかに己れを保って生き得るのであるか。

本誌に拠り、託した私の思いは、またここに尽きるといっていい。

創刊にあたり、〝終末〟から発って、いずこに行くのか、と、私は自らと読者に問うたはずである。ここに至った足どりを振り返れば、貧しく拙いとは言え、やはりそれなりに自然の歩みであった。そして、いま六号を編集し終えた私たちは、新たな次元に立つべき摸索と転回が求められるべき結節点に立ったように思う。

多くの人々が本誌上で読者に呈したものは、またひとりの読者でもある私の、強く示唆と刺戟を受けたところであり、固化しがちな感覚や観念をゆすぶられ、破られ、深い共感と感動にさそわれたところである。生きて努めるならば、さまざまな厚い壁はあろうとも、またおのずからに道も見えて来よう。いま同じ時を生きる多くの人々が、ひとしくそれを求めているからである。読者から寄せられる日々の便りは、痛切にそのことを私に教える。私はそのことに支えられる。（原田奈翁雄）

＊赤提灯が一つ、あとは霧雨に遮られ物の形も定かでなく、古びた石を敷つめられた細い道が足元からぼうっと続いている。かつてここを通り今は死者となっている人も多いに違いない。私は無数の死者の足跡の上を歩く。この空間が死者に満ち、そこに私もまたすっぽり入り込んで時空を共有していると思えば、酔うた頭は不意に彼等を親しく感じる。平和で静かな一瞬。この、死者との関係を一層親密にしたいと思い続けて今二四時。（祝部陸大）

＊Sさんはサンフランシスコで活け花の学校を開いて十五年になる初老の婦人だ。彼女は、三千の流派・家元がひしめいて嫁入り道具の免状乱売業に堕落した〝内地〟の華道は既に死に絶えて久しいと、もの静かに僕に語った。

その家で、おいしいカリフォルニア米のお赤飯をごちそうになった。一緒に出されたすまし汁には、サンフランシスコ湾でとれた上等のワカメが入り、裏庭に植えてあるという色鮮やかなミツバの葉が品よく浮いて、味の素はもちろん入っていなかった。お新香は樽でつけたという。どれもうまかった。アメリカに着いて以来ハンバーグで油ぎったロが生きかえるようだった。「このごろ日本ではポリバケツでつけものを作ってます」と僕は言いかけて、ふと気づく。ポリバケツということばは、この人が日本にいたころはなかったろうな。――窓の外は、ぬけるように青いカリフォルニアの空。

「近頃の日本は、住みにくくなったなァ。なんだかここで暮したくなったよ。」訪米して天皇はそう言って側近を手こずらせるかもしれない。いえ、あなたは国の象徴。日本にいらしてこそふさわしい。（石井信平）

＊鶴見氏と井上氏の対談のために京都に行った。ホテルをとろうと思ったら、どこも満室。やっと見つけてフロントに行くと「受験の方ですか？」、ボーイにも同じことを聞かれた。気がついて見ると、ロビーにもエレベーターにも受験生らしき連中ばかり。やはり、相変らず、大学は健在だな、と思い、不愉快だった。敗けても〝何か〟は残る、と思ったのは、やはり、相変らずのまぼろしだったのか。（松田哲夫）

＊半年前の3号では、仕事の全体がつかめないなどと言っていたのに、今や全体を見通し、管理する栄光のデスクに〝出世〟した。何のうまみもない〝権力〟の座だが、正直言って、他人に命令のできる地位というのは悪くないものだ。世の中になぜ長と名のつく地位が氾濫しているのか、体験的に知りえたように思う。それのもつ構造的な意味については言わずもがなだと思ってはいるが、今まで〝下積み〟の生活（？）が長かったせいか喜びも甚大で、ばかに張切ってしまうこの頃だ。が、実際、それもこれも、すべて、つくづくアホらしいことだと思う。（日比幸一）

次回配本

第七号の発売は、五月二十日です。

なるべく、近所の書店にご予約下さい。

校正＝綴坂由貴／デザイン＝加藤光太郎
製作＝蟻山俊一

終末から　第六号
一九七四年四月三〇日発行
定価三八〇円

編集者　原田奈翁雄
発行者　井上　達三
印刷所　株式会社　三松堂印刷
発行所　株式会社　筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話　東京　二九一―七六五一（代）
振替口座東京四一二三

無断転載をお断りします